

平成 27 年度 ACTR

大宮売神社遺跡出土遺物の調査

向井 佑介

1. 調査の経緯

大宮売神社は京丹後市大宮町周^す積に所在し、大宮売神と若宮売神の二座を祭神とする神社である。古代の文献においては『日本三代実録』の貞観元年（859）に神階授与の記事がみえ、また『延喜式神名帳』では名神大社に列せられている。その境内地からは、弥生時代の土器や古墳時代の祭祀遺物が出土することがふるくより知られており、神社成立以前の歴史を考古資料からたどりうる貴重な例として注目される。境内とその周辺から出土した遺物については、現在までに断片的な報告がなされてきたものの、社務所には未報告の遺物が多く収蔵されており、その全体像が把握できていないことが大きな課題であった。

こうした状況をうけて、京都府立大学文学部歴史学科では、平成 26 年度に大宮売神社が所蔵する考古遺物や古文書の整理調査を実施し、同神社内における展示のリニューアルや学生の展示解説により、その成果を一般に公開してきた。平成 27 年度には、本学の地域貢献型特別研究「京丹後市域の考古資料を中心とした文化遺産の整理と活用」をうけ、8 月と 3 月の 2 回にわたって、境内出土遺物を中心として神社所蔵資料の調査をおこなった。

本年度第 1 回の調査は、8 月 28 日と 29 日に、大宮売神社社務所において実施した。京丹後市教育委員会の新谷勝行・小山元孝両氏の協力のもと、歴史学科教員の菱田哲郎・向井佑介を中心に、考古学を専攻する川崎雄一郎（修士 1 回生）、鳥越祐江（4 回生）、近藤史昭・縄手晴日・西垣剛志・吉岡彩夏（3 回生）、日本史を専攻する大学院生の三輪眞嗣（博士 1 回生）・藤垣朝一（修士 1 回生）が調査にあたった（図 1・2）。整理作業の都合上、3 月に実施した 2 回目の調査については来年度の調査成果とあわせて次号で報告することとし、以下では 8 月の調査について成果の概要を述べることにしたい。



図 1 考古資料の調査



図 2 古文書の調査

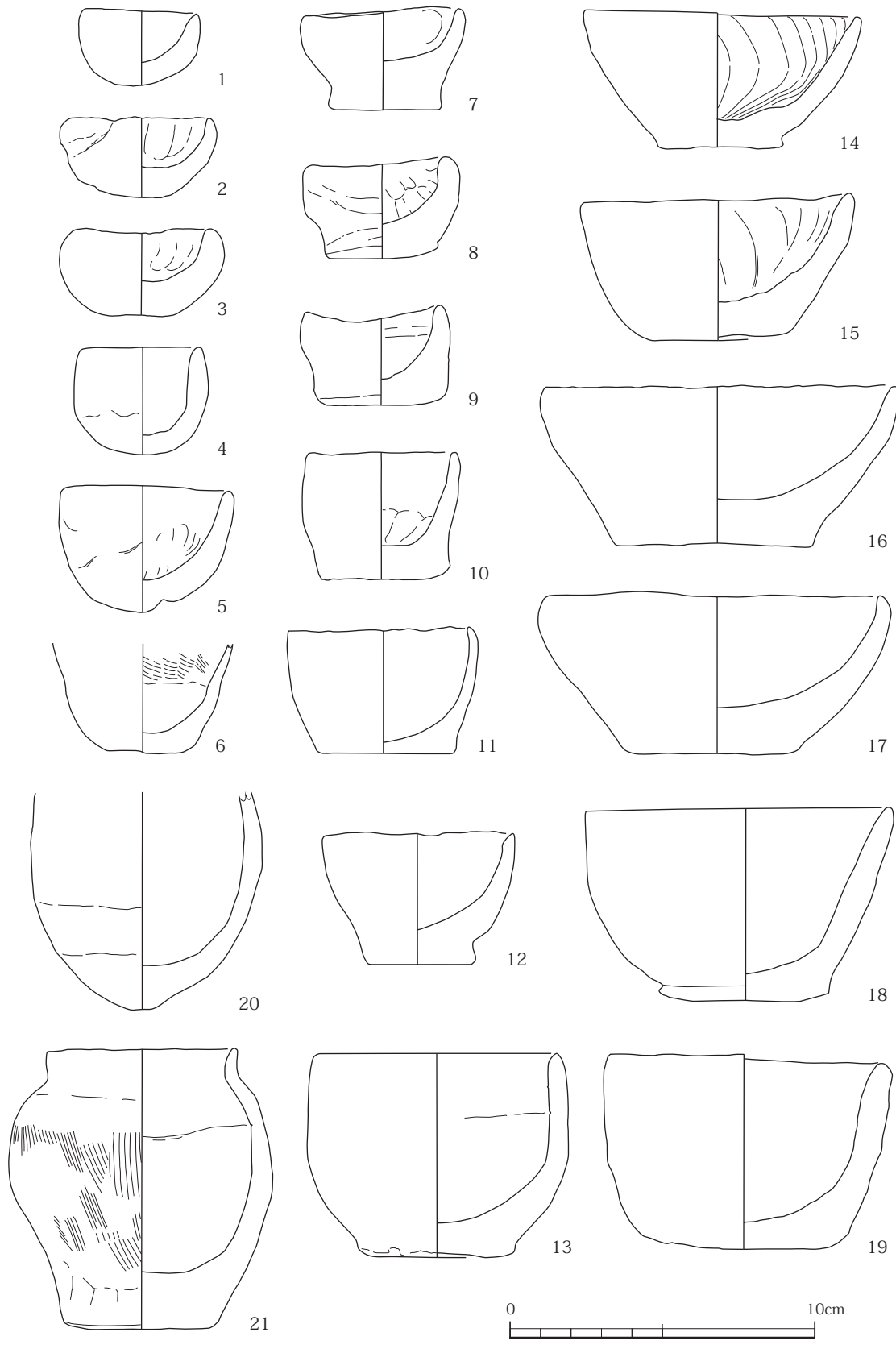


図3 大宮売神社遺跡出土の土師器
 (大宮売神社所蔵 縮尺 1/2)

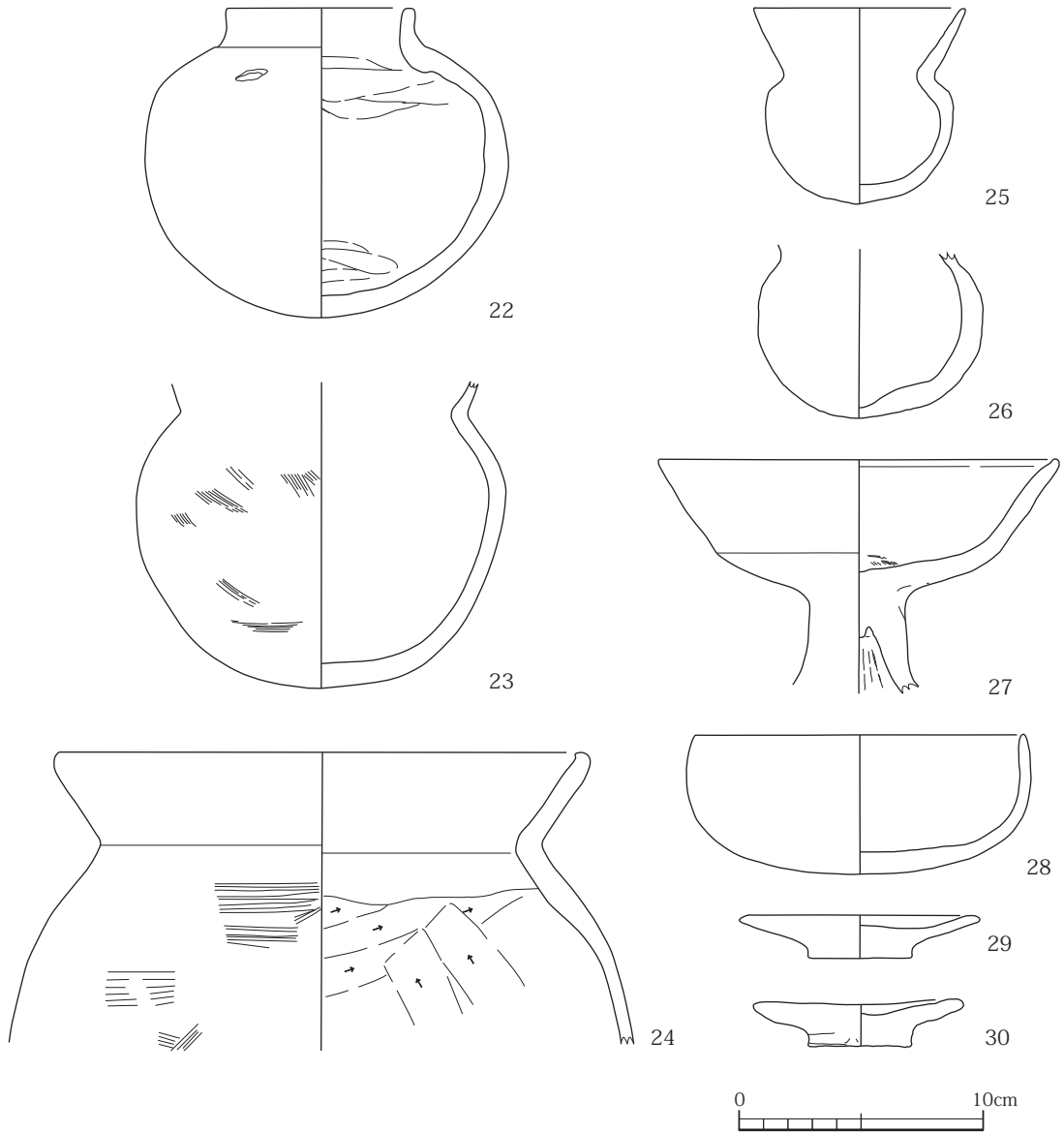


図4 大宮売神社遺跡出土の土師器
(大宮売神社所蔵 縮尺 1/3)

2. 大宮売神社遺跡出土の土器

大宮売神社遺跡出土遺物のうち、神社に保管されているものは、おもに明治44年（1910）二の鳥居が建立された際に出土したものとされ、小型の手づくね土器が多い。今回の調査で実測図を作成したのは、社務所の展示ケースに陳列されている土師器30点である（図3・4）。

1～19は小型の手づくね鉢である。口径6.0cm、器高4.5cmに満たないミニチュア土器の一群（1～12）とそれより大きい一群（13～19）とがある。器形の特徴をみると、丸底で全体が半球形を呈するもの（1～5）と底部が平らなもの（7～19）とがあり、前者はすべて小型の一群に属する。後者はさらに、小型で底部から口縁にかけてまっすぐたちあがるもの（7～11）、丸味をおびた胴部下半からまっすぐに口縁がたちあがるもの（13・18・19）、口縁が大きく外側にひらくもの（14～17）などに細分できる。

製作技法のうえでは、いずれも指先で成形した手づくね土器と考えられ、内面にはコビナデの痕跡が顕著にみとめられる。小型で丸底の1～5は手のなかで成形したと考えられるのに対し、平底の9・13・16・18は底部に葉脈が転写されており、木の葉を台として成形したことが明白である。また、6のように内面にハケメ状の痕跡をとどめ、器壁をやや薄く仕上げるものも存在し、これは器形と調整いずれもほかとやや異なっている。

20は尖底の鉢。内外面ともに調整が粗い。

21は小型の甕。底部が1.9cmと厚く、外面をハケ調整した胴部はやや歪んでいる。やや張った肩部から、短い口縁がわずかに外反しながらたちあがる。

22は広口短頸壺。球形の胴部から短い口縁が直立する。

23・24は甕。いずれも球形の胴部から頸部がくの字に屈曲するもので、胴部外面をハケ調整する。そのうち、24は布留式新段階に属する。口縁端部をわずかに上方へつまみあげて肥厚させ、肩の張りはややよわく、胴部内面をケズリによって薄く仕上げている。

25・26は小型丸底土器。球形の胴部から口縁が大きくひらき、端部はまるくおさめる。

27は有稜高坏。坏部は下半が屈曲してゆるやかな稜をもち、そこから口縁がやや外反しながらひろがる。口縁端部内面をわずかに凹ませている。内面中央にはハケメがのこる。

28は椀。丸底で、全体にやや平たい球形を呈する。

29・30は皿。29は体部下半に回転ナデの痕跡をもち、底部に回転糸切り痕跡がみられる。

3. 大宮壳神社遺跡出土遺物の検討

大宮壳神社遺跡の遺物については、来年度以降も整理を継続する予定であることから、結論は正報告にゆずることとし、以下では若干の展望を述べるにとどめたい。

従来、5世紀後葉から6世紀を中心に考えられてきた祭祀遺物の年代について、昨年度の概報では、24の布留式甕の存在から祭祀の開始が5世紀初めにさかのぼる可能性を指摘し、祭祀の時期を5世紀前半から6世紀後半とした（京都府立大学文学部考古学研究室ほか2015）。本稿で報告した土器も、29・30が中世以降の土師皿であるのを除けば、いずれも5世紀前半から6世紀後半の間におさまる資料であると考えられる。

一方、この遺跡から出土する土器が、小型の手づくね土器によって特徴づけられることはいうまでもないが、同時期の集落遺跡から出土するものと大きく変わらない甕・高坏・小型丸底土器なども一定数含まれており、周辺の遺跡との比較検討を進めていく必要がある。社務所には、戦前・戦中に周辺の遺跡から出土した遺物も保管されており、来年度以降、境内出土遺物とあわせて、周辺遺跡から出土した遺物についても整理と公開を進めていく予定である。

【参考文献】

梅原末治 1923 「大宮壳神社」『京都府史蹟勝地調査会報告』5冊

京都府立大学文学部考古学研究室・中世史研究室 2015 「大宮壳神社の資料調査と展示」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第1号

周枳区 2002 『周枳郷土誌』

橋本勝行 2010 「大宮壳神社遺跡」『京丹後市の考古資料』京丹後市役所

吉村正親 1995 「丹後大宮壳神社遺跡の性格について」『大宰府陶磁器研究』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会